

機能別尺度と内省的分析尺度を使用した教育実習生の指導例

村上 ひろ子

神戸市立葺合高等学校

1. はじめに

文部科学省は平成29（2017）年の学習指導要領改訂により、中学校および高等学校のいずれにおいても、基本的に英語の授業は英語で行うことを示した。また、中央教育審議会は(2006)答申で、「教科指導の実践は教育実習の最も重要な内容である」と述べている。英語の授業は英語で行うことを教育実習生に指導する上で、「教室内英語力評価尺度」の活用法を研究することをねらいとした。

2. 実践校と教育実習生について

実習校は兵庫県の全日制の公立高校で、国際科2クラス普通科7クラスからなる生徒数千人規模の学校である。専門学科である国際科の英語に関する科目数は選択科目も含め16である。そして半数以上の科目はALTとのティームティーチング(TT)で、英語による授業を展開している。普通科では2年次から文系、英語系、理系に分かれ、英語に興味関心がある生徒も多い。

教育実習生は国立大学文学部英文学科の4年生で実習期間は2018年6月1日から21日までの3週間であった。実習学年と科目は普通科1年生のコミュニケーション英語I(クラスサイズ26人・週4回の内2回はALTとTT)と国際科1年生の総合英語(クラスサイズ20人・週2回単独)であった。今回は、国際科1年生総合英語での実践を報告する。

3. 尺度活用の流れ

3.1 事前説明

実習が始まる1週間前に「教室内英語力評価尺度」の使用の同意を得るための説明を行った。文言に関する理解の確認を行った際、実習生から、「教室内教師英語力評価尺度 Can-Do 自己評価チェックリスト」の「誘出 3. 生徒との応答の中で部分的に引き出した発話をつなげて言い直すことができる。」の記述に対して「完全な文」を付け加えた、「誘出 3. 生徒との応答の中で部分的に引き出した発話をつなげて完全な文として言い直すことができる。」という提案があった。また、英語教員に必要な英語力について教育実習生の考えを確認したところ、英語教師の資質として正確な英語と生徒の発言を受信する力と生徒の英語力に適した発信力が必要と考えていることが分かった。

実習生発言内容抜粋

英語教員に必要な英語力は、まず第一に正確性、次いで受信力と発信力だと考え

ます。正確性に関しては、英語に限った話ではないですが、四技能を求められる立体的な科目である上にモデルが少ない、言語である以上受け手が理解できれば良しとされやすい（なানাあになる部分が多い）等の点が挙げられるので、見本としての教師には何よりそれらを正確に行う力が不可欠です。

受信力、発信力については、インタラクティブな教室作りに欠かせないと考えます。生徒は一般的に英語に対する自信のなさから発言をためらう傾向がある為、間違いを容認する姿勢やそれを正しく受け取り、修正して言い直すこと（受信力）と指示や説明、雰囲気作り等、局面に合わせ、簡易な英語選びをする力（発信力）をもちあわせているべきです

3.2 初回実習授業前

初回の実習授業では、児童労働の問題に取り組む “Free the Children” という組織を立ち上げた少年の話を教材とした。

活用尺度として機能別尺度と内省尺度が実習生によって選択された。「明確化」と「修正」の目標とすべき段階で4段階中3が選択されたのは、受信力と発信力に着目していること、「指示と説明」「文法」「語彙」「発音」の段落が3の設定であることで実習生が正確性に重きを置いていることが示された。また『語彙を含めた表現に注目したい』『生徒とのインタラク션을大切にしたい』という考えが実習生から述べられた。

表1 実習生による授業前目標設定（初回）

機能別尺度（段階）		内省的な分析尺度（段階）	
優先的目標	明確化（3）	優先的目標	指示と説明（3）
二次的目標	誘出（2）		生徒とのインタラクシヨン（3）
	促進（2）	二次的目標	文法（3）
	修正（3）		語彙（3）
	意見（2）		発音（3）
	評価（2）		

3.3 最終実習授業前

最終実習授業の教材は初回の続きで、“Free the Children” の創設者である筆者が、児童労働に関して更に知識を得るために海外を旅した際の話を取った。

第1回目の授業前と比較すると、機能別尺度の優先的目標は同様の「明確化」であったが、3よりも2の場面設定のほうが適合するという判断から目標とすべき段階は1つ下がった。二次的目標の変更はなかった。内省尺度の優先的目標と二次的目標の項目は同じであったが、高1のこの段階では段階3が示すような内容をまだ扱っていないという理由で、「指示と説明」「文法」「語彙」の目標段階が1つずつ下がり、それぞれ2となった。

表 2 実習生による授業前目標設定（最終）

機能別尺度(段階)[前回との差]	内省的分析尺度(段階)[前回との差]
優先的目標 明確化(2) [-1]	優先的目標 指示と説明(2) [-1]
二次的目標 誘出(2)	生徒とのインタラクション(3)
促進(2)	二次的目標 文法(2) [-1]
修正(3)	語彙(2) [-1]
意見(2)	発音(3)
評価(2)	

3.4 最終実習授業後（6月21日）

機能別尺度の自己評価では「明確化」「促進」「評価」は2となり、「評価」に関しては『長めのコメントは述べる機会がない』という発言があった。「誘出」「修正」「意見」の評価は3となり、「誘出」と「意見」は目標よりも高い評価となった。内省的分析尺度では、「指示と説明」(2)、「生徒とのインタラクション」(3)、「文法」(3)「語彙」(3)「発音」(3)となり、「指示と説明」に関しては『生徒に説明をする、またそれを十分に理解してもらう自信がない際、日本語を用いた』という振り返りが実習生から述べられた。

表 3 実習生による最終自己評価

機能別尺度(段階) [目標との差]	内省的分析尺度(段階) [目標との差]
優先的目標 明確化(2)	優先的目標 指示と説明(3) [+1]
二次的目標 誘出(3) [+1]	生徒とのインタラクション(3)
促進(2)	二次的目標 文法(3) [+1]
修正(3)	語彙(3) [+1]
意見(3) [+1]	発音(3)
評価(2)	

最終の自己評価において、目標値より下がった項目はなく、教育実習生にとって「教室内英語力評価尺度」が指針となり、意識をして実習授業で実践することができたと考えられる。また、指導者の評価や助言だけでなく、自分で目標と段階を設定することで、自律的に授業改善に取り組むことができたと思われる。実習終了後に開始前と同じ「教師に必要な英語力」について尋ねた。

実習生発言内容抜粋

実習を終え、教師に求められる英語能力というものを考え直してみました。まず大事なものは、発話レベルの調整です。英語活動は指示を通すところから既に勝負が始

まっているため、授業全体として英語があまりに難しいという生徒はほとんど何もできずに終わってしまいます。そこから意欲が低下し、科目に対し苦手意識がついてしまうといよいよ改善が難しくなるので特に注意したいです。

また英語活動独特の雰囲気や教室に入った瞬間から出すことで、皆の集中力や関心を喚起することも忘れてはなりません。英語という「自分たちのものではない」という意識が強くなりがち科目こそ、先生の持つ指導者的な雰囲気が必要になります。そうしてうまく先生に頼ることができれば、誰しも英語力を高めるチャンスが得られます。

4. 尺度使用の実習生への影響

実習前の目標設定においては、実習生の学習者にとって英語話者としての模範でありたいという思いが反映され、内省的尺度では4段階の内の3段階を設定していた。実際に授業を担当すると現状に即した目標値を設定するようになり、「明確化」「指示と説明」「文法」「語彙」においては目標段階が2となった。「指示と説明」「文法」「語彙」分野では最終評価の時点では上達が実感され、自己評価は3となった。

段階4が目標となる授業展開を計画、実施できなかったが、今後の目標としての役割を果たしたと考えられる。

5. 教育実習担当者としての「教室内英語力評価尺度」活用

「教室内英語力評価尺度」を教育実習生の指導に使用する際の利点は発話に焦点を当てるため、「英語で授業」を促進でき、一貫した指導を行えることである。実際、指導案（下記参照）に教室内の教師の発話を項目として新たに取り入れた。

教師の発話を取り入れた指導案抜粋

授業展開（計50分）

時間	内容	教師の発話	生徒の反応
5分	挨拶 →今の状態を訊くなどして英語の態勢に切り替えさせる	“How are you today?”	今の状態を各々口にする
	要約確認 →抜き出したキーワードを元に作成した要約文（宿題）をペア同士でシェアさせ、追加すべき内容などアドバイスを互いに与え合うようにする	“Let’s share your summary. Then exchange your sheet and write one advice or comments about it.”	ペアの要約文を読み、スマートな要約は褒め、課題があれば伝えて互いを高め合う
	その後プリントを回収、Task4 と合わせてチェックし後日返却	“Well done. Then I’ll collect the handout to see your answers of opinion questions based on your research.”	プリントに名前を書いたか確認、提出

留意点としては、2、3週間という実習期間では、段階に変化が現れない場合が予測される。実習生の英語力に尺度を柔軟に対応させる必要性や、実際の授業と尺度場面の間には差異があることも考慮する必要がある。以下は実習期間が3週間の場合の活用例である。

「教室内教師英語力評価尺度」活用例

- 1 活用マニュアルの説明・活用尺度決定（事前）
- 2 指導者の授業を参観して段階判定（実習前）
- 3 優先項目・段階等決定（初回実習前）
- 4 尺度を用いて振り返り（初回実習後）
- 5 次週も3,4を実施
- 6 最終授業後「総合的診断尺度」活用
- 7 全体フィードバック

「教室内教師英語力評価尺度」を使用することにより、実習生は、自分の英語力を分析することができたが、生徒の英語力の変化に着目することはあまりできなかった。今後実習生を担当する機会があれば、教師の評価尺度だけでなく、「教室内生徒英語力評価尺度」の活用を試みたい。

[2020年 月 日公開]